

創立者佐藤義詮の建学への思いを訪ねて

—新制大学創立70周年記念特集刊行を終えて—

別府大学学長 飯 沼 賢 司

今年度、本学は新制大学として創立されてから70周年を迎えました。戦後間もない昭和21年、「真理はわれらを自由にする」という大きな理想を掲げ、別府の地に大学の直接的前身「別府女学院」が誕生しました。翌22年には別府女子専門学校となり、この女専が昭和25年に4年生大学「別府女子大学」となりました。そこから数えての70年歳月が流れました。

2020年は、新型コロナウイルスに明け、コロナの世界的蔓延の中で暮れました。人類は生き方の岐路に立たせられ、どう進むべきかの選択を迫られています。「迷ったときは原点に帰れ」という言葉があります。折しも、創立70周年、コロナ禍でも、われわれは、「原点から未来を考える」をテーマに様々な行事、企画を進めてまいりました。大学創立70周年記念事業として、「人間佐藤義詮」「建学の精神」の独自の調査・探求を行い、九州学シンポジウムでは、12月19日「大学の原点から未来を考える」（コーディネーター 篠藤明德、パネリスト 佐藤瑠威、飯沼賢司、山本晴樹、今井 航、盛本功爾郎）を開催し、創立者佐藤義詮の学んだ文化学院の教育、その学び舎での人の出会い、建学の精神「真理はわれらを自由にする」などについて報告、議論を行いました。

『別府大学紀要』は、1951年1月『別府女子大学紀要』として1号が出されました。まさに大学の出発した年度に産声を上げました。大学創立70周年記念は、大学紀要の70周年とも一致しているわけです。特集には理事長の巻頭言や拙稿の分も含め、前学長佐藤瑠威名誉教授、山本晴樹名誉教授、井上富江名誉教授、仲嶺真信教授、大坪素秋教授など7本の文が寄せられました。私は、70周年記念事業の趣旨に添って、収載の論文を簡単に紹介しながら、記念号のまとめとして、別府大学の歴史、建学の精神の原点を振り返ってみることにします。

一本目は仲嶺真信教授の論考「別府大学建学の精神「VERITAS LIBERAT」—ロゴデザインの変遷及び墨書「円通」とのかかわり」です。仲嶺教授は、建学の精神の分析を、美術史家の立場から、ロゴデザインと「円通」仏語の分析から行っています。まったく新しい視角で、建学の精神、創立者佐藤義詮先生の思いを探求しています。

「VERITAS LIBERAT 真理はわれらを自由にする」は昭和21年の別府女学院の段階から合言葉として使われ、昭和21年銘のバックルには、VERITAS LIBERAT（以下VLと略す）と「豎琴」がデザインされています。しかし、このバックルは1967—72年ころのもので、当初は、「豎琴」型に「BEPPU」の頭文字「B」を抜き出したバッジが使用されたとみえています。仲嶺教授は、ギリシア古代抒情詩に魅了され研究をしていた佐藤義詮先生には、抒情詩を表現する「豎琴」（Lyric）がもっとも身近で価値の高いものと考え、このバッジやバックルをデザインしたことを明らかにしました。

その上で、『別府大学ニュース アルゴノート』から出発し、現在図書館報の名となっている『アルゴノート』については、アポローンから豎琴を授けられたという伝説をもつ詩人・音楽家のオルペウスとの関係から説明しています。かれは、アルゴナウテースたちの遠征の際に、音楽によってオールのリズムを取り、荒波をすずめ、アルゴ一船の勇士を魔敵から救いました。アルゴノートはここに由来するということです。

さらに、バックルにデザインされたロゴデザインと今日使われる円環型ロゴデザインの3タイプのデザインの分析に進みます。円環型のロゴデザインは、「VL・花（オリーブ）・16条の光芒（太陽）」を基本にオリーブは「平和」「知恵」「勝利」「光」「自由」「希望」を表し、それにギリシアの象徴でもある太陽の光輝を組み合わせ、建学の精神「真理」「自由」の象徴としたと解釈できるそうです。

一時、史学科の発足時・発展期に日輪に代わり、臼杵磨崖仏の大日如来が16条の光芒に代わった時期もありますが、大日如来は、太陽のごとき尊格を示す仏であり、「悟り（真理）」「智慧」を表すものでした。大日如来の頭の外側には、「VL」とオリーブの葉が円形に配置され、その示す精神は、円環型の原型ロゴデザインとまったく変わらず、時代に合わせた自由な発想を認めていることも注目されます。

現在は、オリーブの花が「中黒点」に置き換えられています。仲嶺教授の考察によれば、1992年から現在の「中黒点」が始まるようです。1987年に佐藤義詮先生が亡くなり、大学出発の原点が希薄になったのかもしれませんが。私は、1993年に別府大学の助教授として就任しました。やや建学の精神が薄れた時代に大学に入り、ここ10年ほどの短い間に、大学の創立の歴史、その精神を自覚するようになりました。ここからは、私の提案ですが、仲嶺教授の考察・意見を踏まえ、学長として大学創立70年を機にもう一度原点の「オリーブ」の精神を再確認する企画を検討すべきだと考えています。

さて、仲嶺教授は最後に、本学所蔵の「円通」の書に言及しています。この墨蹟は、大分の万寿寺の住持を務めた足利紫山老師の書であり、別府女子大学から共学の別府大学にかわった1954年に揮毫を求めたことを突き止めています。この「円通」は「円」は「真理」、「通」は「自由」を示す仏語であり、「真理はわれらを自由にする」の精神へとつながるという事です。さらに不思議というか、本学は円通寺という禅宗寺院の跡に置かれることになったことを感慨深いと書かれています。本学の建学の精神への思いは、地霊にも響いたと結んでいます。仲嶺教授がその退職の年、このような論考を上梓されたこと、大変意義深いことだと思います。

加えて、仲嶺論に関連して、山本晴樹名誉教授が「佐藤義詮先生の国際性と普遍性」という論考を寄せています。山本名誉教授は、別府大学の歴史と佐藤義詮先生の業績を長年調査し、もっとも詳しい人物です。また、井上富江名誉教授が築いたモンペリエ第三大学（ポールヴァレリー大学）との交流を受け継ぎ、退職後も交流の先頭に立ち続けています。この文は、本学とモンペリエ第三大学（ポールヴァレリー大学）の間で行われた「古代ローマと日本をつなぐ」（2015年研究開始）という共同研究の成果の一部を2020年のフランスの姉妹校モンペリエ第三大学（ポールヴァレリー大学）が『街道・地割・聖地：日本とローマ帝国西部の古代景観の比較』として出版したことを紹介しています。フランス屈指の国立大学でもあるモンペリエ大学の出版局で別府大学との共同研究が世界に向かって発信されたことは画期的なことでした。本の裏表紙には、本学のロゴマークがポールヴァレリー大学、国際関係・フランス諸圏部局、人文・社会科学学際研究センター（CRISE）、人間科学館南部（MSHSUD）のそれとともに並べられており、そのロゴマークは、フランスのどの機関とも遜色のない、素晴らしいデザインであり、「佐藤義詮先生の国際性と普遍性が結晶したデザイン」と山本名誉教授は書かれています。仲嶺教授のロゴデザインの分析と合わせて考えれば、本学のロゴマークの意味、その普遍性、国際性は明らかです。小さな地方私立大学ではありますが、世界で勝負できる大学であると自負できるものだと思います。

すでに述べたように、このモンペリエ第三大学（ポールヴァレリー大学）との交流を実現したのが井上富江名誉教授です。彼女は「モンペリエ大学の恩師達へのレクイエム」という論考を寄

せています。若き日に留学したフランス・モンペリエ大学での恩師達との出会いと交流を書いた一文です。一見、70周年と何ら関係がないように見えます。しかし、本学の国際性と国際交流の視点からすると、創立者佐藤義詮先生の建学からの思いと繋がるものです。

この小さな大学は、創立者の思想形成を醸成した文化学院のリベラルアーツの思想と戦後、ビンセント・エスポジット氏やマリオ・マレガ氏等の海外の方々の協力があって創立にこぎ着けることができました。創立時から実に国際性をもった大学であったといえます。後にエスポジットとの友情関係からハワイ大学と姉妹校となり、義詮先生の母校文化学院の同窓生黄瀛氏との長い友情が四川外語学院（現四川外国語大学）との交流協定を実現しました。その後、韓国の多くの大学や中国、台湾の大学と交流協定を結びます。フランスのモンペリエ第三大学（ポールヴァレリー大学）との交流は、佐藤義詮先生の亡き後の締結とはいえ義詮先生の思いを受け継ぐものであり、最も長期にわたり、学生、教員の教育・研究交流が継続しています。

井上富江名誉教授の文は、彼女が若かりし頃留学先モンペリエ第三大学で出会った恩師シャルル・カンブルー教授、ジャン・マリ・プチ教授との強い絆によってフランスの名門国立大学モンペリエ大学との交流が実現したことを書いています。井上先生の退職後もこの交流は次の世代に受け継がれ、本学から教員・学生の留学・訪問があり、私自身も4回にわたりモンペリエを訪れ、現在もモンペリエ大学からも教員、学生がわが大学を訪れています。別府という土地柄は、ローカリティとグローバリティを併せ持っていますが、創立者佐藤義詮先生が目指したように、別府大学は建学のときから今に至るまで地域性と国際性を併せもった大学であることが改めて確認できました。

もう一篇は、大坪素秋教授の「土屋工と大麦ゲノム研究」という論文です。タイトルから見ると何ら本学の教育・研究と関係があるとは思えませんが、実は土屋工という人物が本学の建学の精神を体現した人物であることを明らかにした論考です。

土屋工先生は、1950年、別府女子大学の設立時に生物学担当教員（講師）として採用されました。土屋先生は京都大学農学部の大学院特別研究生でしたが、病氣療養で宇佐郡安心院町（現在の宇佐市）に帰省していたとき、創立者佐藤義詮の許を訪ね、新設の別府女子大学に採用され、生物学と附属の自由ヶ丘高校、後に併設される短期大学部生活科で教鞭をとりました。

その後、1957年には、恩師木原均が所長を務める、横浜の木原研究所に採用され、大麦ゲノム研究をすすめる多くの業績を残しました。1963年には、カナダのマニトバ大学に留学し、1968年からは、コロラド州立大学の作物栽培学部に着籍を置き、そこで生涯を過ごすことになりました。多くの優秀な研究者を育て、教育、研究の両面からの評価として、コロラド州立大学から「Distinguished Professor」（栄誉教授）の称号を与えられました。

別府大学時代は、7年という短い時期ではありましたが、小麦ゲノム研究で世界的に有名な遺伝学者木原均教授（京都大学）の下で学び、その研究をベースに、大麦の細胞遺伝学的研究のほとんどの基盤つくられたのが、この時期でした。大学を離れて3年後には、京都大学での学位論文（題目：大麦三染色体植物の研究）が受理されました。当時の別府大学は、教職員の給与を払うのにも苦慮した時代と推測されますが、学長佐藤義詮先生は、土屋先生のために、高額な顕微鏡、大麦を育てる畑を用意するなど研究環境を整えてくれたことを土屋先生自身が感謝を込め述懐しています。

また、附属高校の教員として教育にその能力を発揮しています。土屋先生が書いた「別府大学の思い出」の中で、土屋先生が生徒個人の個性と能力に応じた人間形成を養うように熱心に心を配っていたことが書かれています。大坪教授が述べているように「土屋のこうした教育に対する姿勢は、本学創設者佐藤義詮学長による建学の精神の「真理はわれらを自由にする」にもとづい

たもので、コロラド州立大学での研究教育活動に反映されていくことになる。」と書いています。

『佐藤義詮先生十回忌記念 真理と自由』（平成9年発行）に久しぶりに目を通してみると、二宮淳一郎「学長を囲んだ人々」の文中に、土屋工先生のこと書かれていました。ここでも二宮先生は次の様に述べています。「彼はすぐれた研究者であると同時に、群を抜く教育者でもあった。付属高校の講師も兼ねていたが、その教え子が毎日のように研究室にたずねてきた。顕微鏡を覗きつづける彼の姿勢は子供たちに影響を与えずにはおこななかったし、それが子供たちを引きつけているように思えた。学生たちも同じであった。一緒に野山に出掛けて花や虫を追うのも楽しかった。」

二宮先生は大学赴任のときの思い出として、文学部単科の大学にもかわらず、「生物学」の完全講座があり、教授、助教授が置かれ、自分は助手として加わったことに驚いたと記しています。女子大学には、物理研究室もあり、首藤基（しゅとうはじめ）という名物教授がおり、短大には昆虫学者の荒川重理がいるなど、哲学・宗教学の大友芳雄、文芸批評史・米文学の高山虔三、英語学の田北学（『編年大友史料』の編者でもある）、文学の川島つゆ（俳句研究の権威）、考古学の賀川光夫（九州考古学の草分の一人）、音楽の佐藤美子（画家佐藤敬の妻）文化系の教員のみならず、理系の幅広い教授陣を揃えていました。

先の『真理と自由』の中で寄稿した多くの関係者が口を揃えて「佐藤義詮」という人物の人的魅力、教育への情熱、研究への真摯な態度を褒めています。彼の理想に共感し、大学創立の支援をし、終生の友人となったビンセント・エスポジットは次のように語っています。「私たちがサントリーウイスキーを飲んでいたある夜のことが特別な記憶として残っています。私はGisen（ギセンは彼のニックネームでした）に「あなた程の意欲、人格、人間愛を持ち合わせた人が人生で何をやりたいのか」と尋ねてみたのでした。彼は「教養学科の大学を始めたい」と言いました。その夜から私たちは小さな私立大学を創設することについて計画を立て、夢を見始めました。」

別府女学院（別府女子専門学校）の設立以来、二人の夢は大学の設立、それも教養学科の大学設立でした。昭和25年の別府女子大学はその夢の実現であり、リベラルアーツの実践の場であったわけです。本学の教育の基本姿勢は、小さな大学であることを活かした学生一人ひとりに寄り添った大学づくりであると同時に、薄い教養教育ではなく、研究の深淵に到達する深い教養教育（リベラルアーツ）です。「真理はわれらを自由する」とはまさにこの実践を見事に言い表した言葉であると感じます。

最後に、佐藤瑠威前学長の「建学の精神と別府大学文学部の歴史－新制大学創立70周年によせて－」について触れたいと思います。佐藤瑠威先生（以後瑠威先生と呼ぶことにする）は、義詮先生のご子息で、政治学、哲学を専門としています。長年、建学の精神の出典、その意味を探求されてきました。今回それらの成果をまとめて論考を書かれています。

瑠威先生は、「佐藤義詮が文学部の創設に込めた考えは、文学部教育こそが自由と真理を愛する新しい時代の人間を形成するうえで最も必要な学部であるということだ。」と書かれた上で、建学の精神と文学部の創設とは切り離せないとしています。「本学の文学部は、地方の小都市という極めて厳しい条件のもとで、建学の精神に基づいて学問を通しての人間形成、すなわち本来の、真の意味での教養教育を目指そうとした」という原点をしっかりと肝に銘じる必要があることを主張されています。

しかし、「その創設時の高邁な理想にもかわらず、別府大学文学部が70年の歴史を経ていくためには、創設の理想とは別の要因に恵まれる必要があった過去の歴史から学ぶ必要がある。」とも言っています。それでもなお、「文学部の未来は、他の学部にはない文学部教育の特質であ

る人間形成としての真の教養教育のあり方を探求していくこと、そしてさらに、社会が急激に変化し、それに伴って人間の職業形態も大きく変わっていく時代にあって、専門的知識を超えた広い視野と知識を養うことによって、どんな時代、どんな社会においても必要とされる普遍的な人間性を形成していくことにあるのではないかと結んでいます。エスポジットとともに夢見た教養学科の大学は、「文学部」に凝縮されていたわけです。しかし、それは、ただの文学部ではなく、深淵な教養主義に裏打ちされたものでした。

本年の原点をさぐる旅を経て、佐藤義詮先生が大学創立に込めた思いは、間違いなくわれわれの心を動かすものでした。この大学には、それだけの教育・研究の精神、宝があるわけです。本論集所収の論文はそのことを明らかにしてくれました。また、その精神を受け継ぐ成果でもあります。新制大学創立70周年を機にわれわれは、創立者の熱い思いを自らのものにし、大学の新たな飛躍を夢見ることができるはずです。

「真理はわれらを自由にする VERITAS LIBERAT」。理想を高くもった小さな大学、地方から世界をめざす大学に栄光あれ。